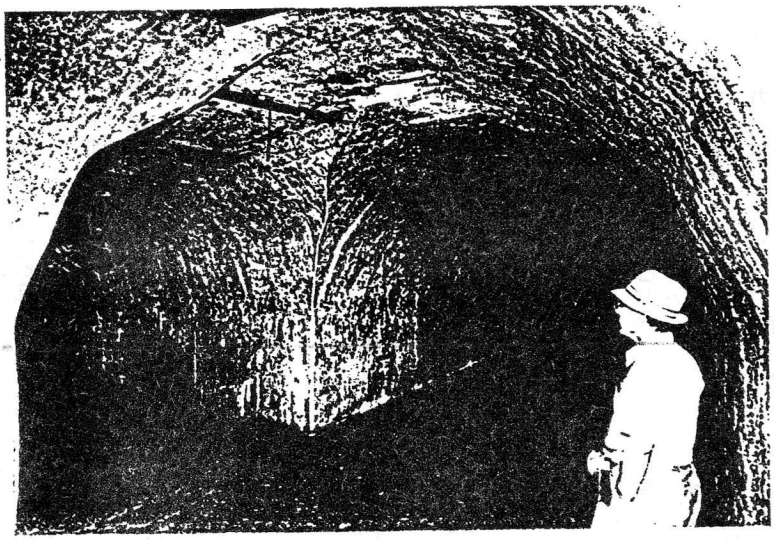
日吉台地下壕保存の会
会　報

第3号
発行　日吉台地下壕保存の会
編集　事務局
〒223
横浜市港北区下田町3－15－27
TEL　044-62-1282　（寺田貞治方）



連合艦隊司令部地下作戦会議室

目　次

○着々と進む調査活動　1
○第4回幹事回報告　2
○第5回幹事回報告　2
○敗戦前後の日吉の様子　3
○蟹ヶ谷にも地下壕が存在　4
○焼夷弾発見　4
○「おしらせ」地下壕見学会　5
○朝鮮人労働者の人数が判明　5
○松代大本営跡の地下壕を見学して　5
○編集後記　6

着々と進む調査活動

事務局長　寺田貞治

保存会の活動も、大きな拡ろがりを見せ、テレビ、新聞でも大きく報道されるようになってきました。入会者も増え、会員数も十月二日現在で二百二十七名に達しました。

調査活動も順調に進み、当時のことが、次第にはっきりしてきました。特に、日吉台地下壕を掘らされた朝鮮人労働者の実態が、幾らか明らかになってきたことは特筆すべきことでしょう。

先日、藤沢で慶應大学新学部建設に伴う文化財の調査に従事されている方から、藤沢のキャンパスからも米軍の本土上陸を迎撃するための地下壕が発見されたという便りがありました。

私達が調査しなければならないことは一杯あります。会員の皆さまのご支援、ご協力を切にお願いします。

第四回 幹事会報告

八月五日に慶應義塾藤山記念館中会議室で、ビデオによる学習会の後、開かれた。

報告事項

①プロジェクトチームの活動について＝元海軍省経理局主計課士官の千葉朝夫氏からのヒヤリングで、戦争末期の日吉での様子と南海の孤島で起こった悲惨な人肉事件の話を伺った。②ビデオによる学習会について＝八月五日午後四時より藤山記念館会議室で行われ二九名が参加。③朝鮮人労働者の問題について＝孫正寅氏（在日本大韓民国居留民団中央本部国際局次長）に当時の関係者の消息の調査を依頼した。④マスコミ関係＝NHKテレビ八月六日ビデオ撮り、八月七日放映予定、東京新聞八月八日取材予定。⑤松代大本営跡を見学＝七月二五日、大日方悦夫氏（松代大本営の保存をすすめる会・事務局長）の案内で、松代の地下壕を見学した。延べ三百万人の人によって約九ヶ月で延べ十三キロの地下壕が掘られた。強制連行による朝鮮人労働者は約七千人と言われ、もっとも危険なところで、劣悪な条件のもとに働かされ、多くの人々が亡くなったという。

幹事よりの報告

茂呂氏より＝軍令部警備隊の人の証言を聞いた。又、七〇才の老婆より被災届を当時市役所に出したことを聞いた。

久我氏より＝当時の米軍の資料があることがわかったので調べてみるとのこと。

議事

①会報第三号の発刊について＝九月下旬に発刊。聞き取り調査の内容を載せる。②活動の進め方について＝調査活動・PR活動・会員募集について話し合う。③その他＝八月六日午後一時に日吉キャンパスの警備員室前に集合した後、日吉本町の人に当時のことを聞き取り、地下壕にもぐる。このときNHKも来てビデオを撮る。

第五回 幹事会報告

九月二二日に慶應義塾藤山記念館中会議室で開かれた。

報告事項　事務局より

①プロジェクトチームの活動について＝第三回会合が九月十五日に開かれ、地元の方で当時の事を知っておられる厚川米作氏（戦災者）と石本正之氏からのヒヤリングが行われた。宮前地区では四八軒のうち、三十軒近くの家が焼けたという。今後の予定として、十一月ごろ松代大本営跡の地下壕の状況を視察する。②マスコミ関係＝NHKテレビが九月六日地元の人から聞き取りの様子と地下壕のビデオを撮り、また八月七日には七分間放映された。神奈川新聞が八月十六日の朝刊にプロジェクトチーム発足したことを掲載。東京新聞「夏ふりかえれば昭和」という特集で八段にわたって日吉台地下壕について掲載。③調査活動について＝蟹ケ谷の東京通信隊の地下壕を調査。（別掲）。連合艦隊司令部および設営隊の方々八名に原宿の水交会に集まってもらって話を聞いた。その他、日吉台地下壕の関係者十一人に話を聞いた。

幹事より

綱島街道軍用道路として作られたことや、NTT日吉局が作られたのも軍との関係があるといわれていることなどについて調査する必要がある。

議事

①第三号の会報の発刊について＝内容は久保寺、小嶋両氏の聞き取り（茂呂）、焼夷弾の発見（梅沢）、松代の地下壕（加賀谷）、蟹ケ谷の地下壕と朝鮮人労働者（寺田）。発刊は九月末日。②当面の活動計画＝見学会は十月十五日（日）、ヒヤリングは「海軍の組織・機構について」吉田照彦氏（海軍戦史研究家）十月十八日（水）五時、藤山記念館中会議室で開催。③松代大本営の保存をすすめる会から「大会などを開くとき連帯のメッセージが頂けないか」という要請に関して承諾することに決定。

敗戦前後の日吉の様子

茂呂秀宏

去る七月二九日、日吉台中地歴探訪会は、日吉本町二丁目の旧家である小嶋邦夫さん宅で近所の戦争体験者数名に集まってもらい、お話を伺いました。集まってもらったのは、軍司令部警備隊の久保寺さん夫妻（昭和一九年九月に日吉に入る）、当時東急に勤務されていた市野さん夫妻そして小島さん親子と探訪会の生徒六人、職員二人でした。

○当時の食料事情について

・米対麦が二対八の麦飯、それにさつまいもにタクアンがついているのが普通（市野さん）

・軍では白米のみ。タバコも自由、日吉にきて太りだした（久保寺さん）

・まわりが農家だったのでめぐまれていた（市）

・まわりの農家は麦を食べていた。軍に白米を供出させられていた。米の検査は厳しかった。（小嶋さん）（市）

・軍内部では上の人はニシンなどの魚がつく。下のほうの人は恐ろしくしょっぱいシャケ。終戦になればなるほど食料事情は良くなった。

○服装・風呂などについて

・モンペが普通。モンペにもよそいきのものと普段着のものがあった。詳しくは日吉台小三〇年史に書いてある。（市）（久）（小）のおばあちゃん

・洋服にしらみがついている。しらみとりでインクビンが一杯になった。しらみをとりすぎると風邪をひく（久）

・ここに疎開にきていた子供たちが近くの農家に風呂をもらいにきたがたくさんのしらみを持って来た。（小）のおばあちゃん

・軍の中では、浴槽内を汚さぬために、風呂に入るときは手をあげたまま湯ぶねの中に入らされ、手を湯に入れるとひっぱたかれた。

○空襲の様子

・焼夷弾で家を焼かれたり、爆弾の直撃をくらった。（久）（市）のおばあちゃん

・最初に空襲があったのは宮前、三月二四日で90％がやられた。（市）（久）

・焼夷弾が雨のように降った。蟹ヶ谷の通信隊・慶應をねらって落とされた。大倉山もやられた。（久）（市）

・三月二四日前で、野外で草を刈っていたら戦闘機が低空でやってきて撃たれた。隣の人が足をやられた。貫通した。

・ユニーの近く、駒林神社近くに大型爆弾が落とされた。

・油脂焼夷弾はなかなか消えず、こわくなって逃げた。（おばあさん達）

・羅災証明書が被害をうけるとだされた。それを持っていくと優先的に物が配給された。（市）

・米軍機が墜ち、米兵をつかまえた。丸首のベティさんの絵がかかれているシャツを着ていた。背が高く自分が引きずられるようになった（久）

○地下壕建設の様子・地下壕と住民との関係について

・地下壕の建設には韓国の人が多くいた。おなかをすかし、ぼろをまとったような人に、本来なら捨てるべき残飯をわけてあげた。全くひどい生活をしていた。（久）

・肩のところが切れ、つぎはぎだらけの服を着、地下足袋をはいて、モッコをかついでいた。（久）

○終戦から戦後の様子

・戦争が終わると地下壕に残っていた味噌・醤油が持っていかれた。（久）（市）

・トラック・馬に食糧を積んで持っていった将兵がいた。（久）（市）

・十五キロの砂糖をかついでいった者もいる。（久）

・たくさんとられたんだからといって周囲の農家の人々も持って行った人がいた。

（久）

・慶應内の敷地や、日吉台小学校の近くにあったスクラップもいつの間にかなくなってしまった。（市）

○米軍の占領について

・米軍は昭和二四年ぐらいまではいっていた。（久）

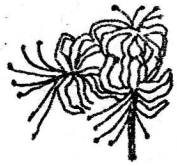
・米軍が日吉の町に出てくることもあった。黒人兵が砂糖をもってまず売りにくる。そのあと憲兵が砂糖を取り上げにくるという詐欺みたいなことがあった。（久）

・戦後、米軍は隣組に労働奉仕を割り当てた。家でもやらなかった選択をやらされた。その時生まれてはじめて洗濯機を使った。

○（戦争についての感想）

・戦争はいやだ。畑に立っていただけで撃たれるなんて。

・横須賀にいた時、兵が逃げた。おむすびを頭に結び浄化槽の中に数日間隠れていて発見された。アンモニアをたっぷり吸い込んだ上、めちゃめちゃになぐられ丸太のようになって死んだ。戦争はいやだ。（久）



蟹ヶ谷にも地下壕が存在

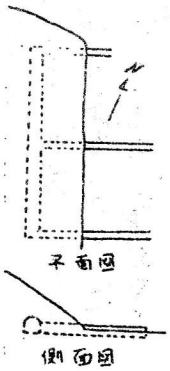
竹藪から二億円が出た騒ぎのあった近くに、海軍の東京通信隊のはいっていた地下壕があった。

地下壕は、ヨの字型をしており、東西方向の三つの地下壕（いずれも長さ一〇メートル前後）の東側に出入口があり、奥に南北方向に地下壕（長さ約五〇メートル）があって、三ヶ所に空気抜きの縦穴がある。地下壕の大きさは東西方向のものが幅一・五メートル、高さ二メートル、南北方向のものが幅四メートル、高さ三メートルぐらいであると地元の人に聞いた。

造った時期は昭和十九年春から秋にかけての約半年間であった。地下壕の中は壁に向かって通信機が一杯ならんでいたという。

久木・蟹ヶ谷から下田町の丘の上には木柱が林立し、アンテナが張り巡らされ、直径三センチのケーブル線が埋没され、この地下壕に引き込まれていた。又、慶應キャンパス内の連合艦隊の方へもケーブル線がつながっていたという。ここの通信隊は、海軍の各部隊からの電波を受信するのが任務であった。送信は保土ヶ谷や船橋の通信隊からであった。

蟹ヶ谷の丘の上に通信隊の建物があり、捕虜や特攻隊志願の兵がいた。戦後一年間米軍が進駐していた。やたらに銃をぶっぱなすので危なかった。地下壕にあった通信機は米軍がトラックで運んでいったという。



焼夷弾発見

梅沢滋隆

太平洋戦争のとき米軍のB29機が日吉の地下壕空襲を目ざして投下した焼夷弾を二発（不発弾）発見した。（発見者は梅沢滋隆）。

その発見場所は日吉四丁目十六番付近で日本国土（株）の土留の工事で土手（慶應側）を発掘中に土の中から出土した。工事の職人さん達は焼夷弾を知らなかったので教えて上げた。四丁目方面の山の地下に防空壕があり、下の道路よりの土手から防空壕の地下水が流れ出ております。梅沢は今までに二本発見し、今回の発見のうち一本と前回の二本とは地下壕の幹事会に渡してあり、後の一本は他の学者にお見せしてから幹事会へ渡しますが今回の発見は九月十一日（月）の昼休みに私が昼食を取りに家へ帰ったときでした。

おしらせ

地下壕見学会

日時　十月一五日（日）
　　午後二時～四時
集合場所　東横線日吉駅東口
　　慶應大学警備員室前
集合時間　午後二時
服装　長靴・汚れてもよい服装・帽子
持物　懐中電燈・軍手・カメラ（フラッシュを忘れずに）
注意　①小さいお子さんの参加はご遠慮願います。②農家の庭先からはいるので、迷惑にならないようにすること。③みんなから離れないようにすること。④泥で滑り易く、排水溝やマンホールがあるので気をつけること。⑤農家の人が水を利用しているので、水を汚さないこと。⑥万一事故があっても責任は一切とりません。

参加申込　参加希望者は、事務局まで、電話またはハガキでご連絡ください。

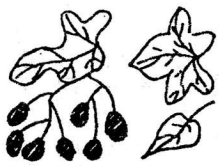
朝鮮人労働者の人数が判明

御廚文雄氏（第三〇一〇設営隊主計長）より、朝鮮人労働者の人数が判明した。朝鮮人労働者は、民間の鉄道工業株式会社（隊道を掘る会社で社長は菅原通斎）が連れてきた。日吉に来たのは、日本人の社員が約三百人、朝鮮人労働者が約七百人であった。

鉄道工業は海軍から仕事を請け負ってやっていたので、鉄道工業が朝鮮人労働者をどのような条件・待遇で働かせていたかはよくわからなかったが、ひどかったらしいことは聞いた。御廚氏は行くと面倒なことが起こるので現場には行かなかった。

久保寺重夫氏（東京警備隊第七分隊長）によれば、朝鮮人労働者が警備隊の烹炊所に残飯をもらいによく来たという。彼らは服は汚くボロボロでつぎはぎだらけのものを着ていた。二十四時間ぶっ通しで三交代制で地下壕を掘っていた。飯は一日二食で相当ひどいものを食べさせていたようであった。周辺の農家の人の話でも、時々見るに見かねてご飯を食べさせてあげたこともあったという。

朝鮮人労働者の問題は、もっと調査し、掘り下げて考えていかなければならない問題ではないかと思う。



松代大本営跡の地下壕を見学して

加賀谷欣之助

七月下旬、松本での大学生協セミナーの帰りに松代大本営跡地を見学できたことは幸いでした。

丁度、長野県民生協の「平和活動委員会」主催「松代の旅」に便乗させていただき、委員の方や、案内役の大日方先生（長野工業高校）には大変お世話になりました。

参加された生協組合員（お母さんたち）や「保存をすすめる会」のみなさんの熱心さには頭の下がる思いをしました。

さて「松代大本営」の全貌が明らかとなったのは最近のことで、地元の篠ノ井旭高校の生徒達が修学旅行で沖縄の壕を見学し、集団自決の悲惨な話を聞き、帰って来てから自分達の郷土には松代大本営跡があることに気付き、地下の測量や聞き取り調査をすすめ、発表したことから始まりました。

彼らの呼び掛けで、八六年には市民による「保存をすすめる会」が発足し、現在は、保存要請署名が四万名を突破するなど、活動のうねりは大きく広がっています。

地下壕は三つの山（象山・舞鶴山・皆神山）に掘削され、その総延長は13キロ

メートルにも及ぶという。総面積は4300平方メートル、甲子園球場の4倍の広さであった。最初、象山の地下壕（政府・NHKが入る予定だった）に実際入って見ると、岩盤をくり抜いただけあって湿気がなく大変涼しい。（この点は日吉台地下壕とは大分異なる）

搾岩機などはなく、ドリルであけた穴にダイナマイトを押し込み発破しては石屑をトロッコで運びだす作業を人海戦術で進めたという。いたる処にその穴の跡が見える。

後に行った舞鶴山（大本営予定）の地震観測所の案内文には「多くの国民を動員して大工事を強行した」とある。実際は周辺や近県からの徴用や学徒動員もあるが、主な労働力は東北の飯場から集められたり、朝鮮半島から強制連行されて来た朝鮮人が大部分であり、その数は7000人にものぼるという。

ブタ小屋のような飯場に押し込み、三食ともコーリャンめしで十二時間労働を昼となく夜となく九ヶ月にもわたって続けられた。

しかも最も危険な作業を強制され、多くの怪我人や死人を出したようであるが、その数は今だに不明である。

この人たちがどんな悲惨な思いをしたことか、又、国家権力がいかに人道にもとることを強制するものかを考えざるを得ない。

壕のなかほどのやや広い所で、参加者一同黙祷をした。ライトを消し、真の暗闇の中で、物音一つしない所で四十年前のことを想った。（この壕工事にたずさわった朝鮮人（父親）の娘の山根昌子さん（当時五才）の書かれた「遥かなる旅」（銀河書房）を読むと、当時と戦後も長い間差別を受け、苦しみ続け、生き抜いて来たことに感銘を受けます。）

何のためにこのような大工事を強行したのか。

それはただ国体護持、天皇制支配体制の温存にあった。

一九四四年春には太平洋戦域での日本の敗北は日に日に濃厚となり、本土が空襲を受け、大本営は「一億玉砕」をスローガンとした本土決戦の道を選択した。

そして沖縄で出来るだけ戦争を長びかせ（沖縄県民を犠牲にし）その間に本土決戦の準備をすることにあった。

松代大本営計画は遷都計画であると「保存の会」の方は言います。当時2000万人の関東地方の国民は危険にさらしたまま、自分たちは安全なところに逃げるという発想である。いざという時、国家権力や軍隊は国民を決して守らないという説明には説得力があった。

又、戦後地震観測所は、防災上、大変役立っているとはいえ、密かに米軍の核戦略の下に組み込まれ、世界の地下核実験の観測が早くから行われていたという話を聞き、大変驚いた。

「保存の会」の努力が実り、松代大本営跡の完全保存・全面公開・「平和祈念公園」の実現を心から願う次第です。

「戦争の傷跡」の調査・保存、残り少なくなってゆく「証人」（体験者）の聞き取り調査などをすすめ、学ぶ中で、戦争の悲惨さ、平和の貴さを感じる幅のひろい活動が大事であることを痛感したことでした。

編集後記

◆9月下旬に発行する予定でしたがまたもや遅れてしまった。怠けていたわけではありませんがついつい忙しさにかまけてしまった。

◆調査が順調に進み，いろいろなことが分かってきましたが，全部載せることが出来ないのが残念です。

◆終戦記念日の前後に新聞・TVで放映されたので，会員も少しづつふえています。

◆会報その他なにかご意見・ご感想がありましたら，事務局までお寄せ下さい。